相互貸借業務における verification の現状

Current Phase of Bibliographic Verification in Interlibrary Loan Works

吉 田 昭*

筑波大学附属図書館

Yoshida, A. : Current Phase of Bibliographic Verification in Interlibrary Loan Works. *Igaku Toshokan* 33(2) : 150-155, 1986.

Bibliographic verification is greatly emphasized in the interlibrary loan works of the Japan Medical Library Association (JMLA). However, in actual fact, most member libraries manage to verify bibliographic data in spite of the recent opinion that bibliographic verification is unnecessary.

Analyzing the reasons for refusal to measure the effect of bibliographic verification, it is clear that half of them relate to the fact that the items requested are not held, and that bibliographic verification is not particularly helpful in avoiding refusals. Moreover, it appears that the provision of missing bibliographic data does not always contribute to the eradication of refusals.

The author points out that holding, arrival and binding information also needs to be checked systematically, and that this information is necessary for any discussion of medical librarianship in terms of bibliographic verification.

I. はじめに

JMLA (日本医学図書館協会) の相互貸借活動が、互恵互助の原則を堅持する場合、それは単に量的なバランスを保持するだけでなく、質的なバランスを維持するものとも理解されている。そもそも JMLA のネットワークそのものが均質な集団のものとして、あるいは少なくともそのようであることを目指して、形成発展してきたことは事実である。そして、そのような均質性は、相互貸借業務においては依頼行為における書誌事項の確認、いわゆる verification の徹底という仕方では具体化され、それがそのまま図書館員の専門性の例証ともされている。ところが、verification がこのように強調されるほどには、その実態と効果について、それほど関心が払われていないようである。本稿

ではこのことについて若干の考察を加えることにより、verification の現代的位相を提示したい。

II. verification の実情

verification という語は、相互貸借業務では書誌事項の確認として理解されている。書誌事項とは、求める文献を同定するために必要な項目のことであり、たとえば雑誌論文の場合だと、誌名、巻号、頁、年、著者、論題を指すのが一般的である。これらの事項によって、申込者はその要求する文献を明示するわけであるが、その出所となるものは一般に原著の reference である。これを確認しなければならないのは、申込者のもたらす情報が不正確だからである。申込者の転記ミスもあるが、reference そのものが誤っている例もかなり多い。¹⁾ 資料と利用者を結びつけることが図書館員の基本的営為であるならば、こうした情報を正確な情報に変換することは図書館員の責務であろう。この作業によって、受付館における処理がスムーズに流れ、

* Akira YOSHIDA : The University of Tsukuba Library,
1-1-1 Tennodai, Sakura-mura, Niihari-gun, Ibaraki,
305 Japan

それがそのまま依頼館における利用者サービスの質を高めることになるし、受付館が書誌事項を再調査せずにすむことで、依頼館の受付館に対する礼儀が貫かれることになる。そうした意味で、図書館員の存在証明として、あるいは専門性の内実として、verification の徹底が強調されるのも頷けるのである。

ところが、実際の verification がどれだけ励行されているかという点、そうした強調にもかかわらず、現状はそれほどでもないようである。JMLA が昭和55年4月に行った相互貸借業務実態調査から、verification の実施状況を示したものが表1である。ここに見られるように、相互貸借活動では最も先進的であると評価されている JMLA においてさえ、加盟館の半数は条件つき実施にとどまっている。しかも、その条件の内容はいまいであるとして、洋雑誌に比して reference に欠陥が多いとされる和雑誌について、²⁾ 本来それだからこそ verification をしなければならないはずであるのに行っていないとか、問題があると判断される場合のその判断が、担当者の多年にわたる経験と直感から得られるものであるにせよ、実務経験の浅い担当者が多いという現状からすれば、ほとんど偶発的な発見に頼るものではなかろうか。

それでは、どうして verification の徹底を期することができないのか、先の実態調査から不完全実施館の回答を示したものが表2である。人手とツールの不足が主たる理由とされているが、近年、扱う資料とサービスの量的増大、質的多様によって、図書館の業務をめぐる環境が急激に変貌しつつある。しかしながら、定員は増員どころか削減される一方であり、また、

二次資料の高額化は、あまつさえ独自の予算に乏しい図書館経費を圧迫している。このように、書誌事項を確認しようにも人手がなく、かりに時間に余裕があっても調べる道具がないという劣悪な条件のなかで、図書館員としての自覚と体験が、かろうじて可能な範囲での verification を行わせているというのが実相であろう。それだからこそ、相互貸借マニュアルでも書誌事項の確認が明言されているにもかかわらず、結果としてそれを怠っているとしても、前述の実態調査で加盟館の9割がマニュアルの遵守に満足を示したのは、そうした現場の実情を踏まえてのことなのであろう。したがって、verification の徹底は理念としては当然のことであるにせよ、現行以上に徹底を期するということは、少なくとも加盟館の多くには無理な注文とでも言うべきものなのかもしれない。逆にそれだからこそ、互いの事情を思いやることが JMLA 内部の緊張関係を弛ませることを危惧して、verification の徹底がいっそう強調されるのかもしれない。

表2. 書誌事項を確認しない理由

(JMLA 加盟46館)

	大 学	そ 他	計	
二次資料が不備	4	2	6	11.3%
労 力 が な い	30	9	39	73.6
その必要がない	6	0	6	11.3
そ の 他	2	0	2	3.8
計	42	11	53	
(複数回答)	5	2	7	

出典：相互貸借業務・実態調査集計報告書

表1. 文献複写申込みにおける書誌事項の確認

(JMLA 加盟95館)

	大 学	そ 他	計	
二次資料により可能な限り行っている	44	5	49	49.0%
和 雑 誌 は 行 っ て い な い	5	0	5	5.0
問題のありそうな場合のみ行っている	37	9	46	46.0
行 っ て い な い	0	0	0	
計	86	14	100	
(複数回答)	4	1	5	

出典：相互貸借業務・実態調査集計報告書

Ⅲ. verification は不要か

ところが、このように細々と遵守されている当の verification そのものに対し、その実行に疑問を呈する見方が出現しつつあることも事実である。こうした議論がわずかながらも提起されるに至ったのは、申込者のもたらす情報が、昔日と比べて非常に正確となってきたことを背景にしている。近年、reference への配慮が編集者や執筆者の間にようやく浸透し始め、とりわけ洋雑誌については、その信頼性がきわめて高くなっている。⁹⁾ また、最近の利用者教育の進展により、申込者本人が二次資料で書誌事項の確認をしたり、申込書への転記に注意を払うようになったことも、こうした現状にいくらか与っているかもしれない。このように申込者の提出する書誌事項の正確度が増し、それが図書館側の人手やツールの不足と相俟って、verification を相対的に意義づける議論が生まれるようになったのも、あるいは自然な帰結と言えなくはないであろう。従来、図書館員が自館の利用者と相手館との間にあって、verification という行為をもって主体的に参与し、その存在意義を保持していたのであるが、こうした立場では、両者の単なる仲介者としての性格が強くなるのはやむをえない。そこでは、書誌事項に誤りや不備があれば申込者がその責を負い、受付館はそうした場合に迷うことなく謝絶してよいという論理になる。こうした事態の出現率がきわめて小さいと仮定すれば、かかる見解の妥当性もある程度は認めなければならないであろう。もちろん、そうした論理が成立するためには、図書館と申込者、依頼館と受付館との間に充分な合意が前提されなければならない。そうでなければ、結果的に自らの図書館員としての立場を放棄することになるし、また、そうした依頼は単なる非常識なものとして、相手館との円満な協力関係を損ねてしまうからである。

Ⅳ. verification の評価

このような verification そのものへの疑念について、その当否を客観的に判断するためにも、verification が

実際の相互貸借活動にどれだけの効果をもちうるのかを検討されなければならない。問題とすべきなのは、図書館員の当為としての verification というのではなく、相互貸借業務の一過程としてどのようにそれを評価するかということである。そもそも verification が、相互貸借活動を円滑に実施していくための手段であるとするならば、その効果を絶えず吟味しなければならないはずである。評価の尺度としてはさまざまなものが想定されるが、業務面でも奉仕面でも最も非生産的な謝絶との関連で捉えることは、あながち意味のないことではあるまい。もっとも、受付館における書誌事項の再調査によって、本来は謝絶されるはずのものが回避される場合もあるに違いない。しかしながら、受付館でなされる bibliographic checking の実態については、わが国では数値を提示した報告はないようである。

さて、謝絶の実態については、すでに多くの報告が提出されているものの、いずれもそれぞれの視点に沿った自館だけのデータ解析にとどまっており、また、既述の実態調査でも謝絶に関する項目はなく、加盟館統計でも謝絶の実件数は明示されていない。したがって、ここでは加盟館の個別報告のうち、実態を明確に提示している5館について、⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾ その最新1年間の受付データを分析するが、すべてが相互貸借マニュアルの謝絶項目に準拠しているわけではないので、さらにそれらを大まかに類別したものが表3である。これら5館については、蔵書の量や質、相互貸借活動の水準にも大きな差異があることは言うまでもない。ところが、受付件数の多い伝統館ほど謝絶率が高くなることを別にすれば、おおよそ類似した傾向を示していることが看取される。すなわち、謝絶率が10%前後であること、謝絶理由のほとんどが所蔵なし、未着、製本中、参照不完のいずれかだということである。10件に1件は謝絶されるという状況をどう評価するかは、もちろん見方によって異なるが、やはり看過しうる付随的な現象と理解することはできないであろう。ここで注目しなければならないことは、謝絶に占める参照不完の割合が1割前後にとどまっていること、欠本、欠号などを含めた広義の所蔵なしが全体の半数を占めていること

である。未着、製本中という依頼館においては予測不能なものもみなされているものを除けば、本当に問題にすべきなのは参照不完ではなく所蔵なしという事項なのである。ここから導出される帰結としては、verification を単に従来からの書誌事項に限定して云々するだけでは、受付館に無用な負担をかけさせないという点では一定の機能を果たすことはできても、謝絶の回避にはほとんど役立っていないということである。筑波大学附属図書館に申込まれた医学図書館所蔵資料の文献複写について、昭和59年度における謝絶状況を示したものが表4であるが、こと謝絶に関しては、加盟館に比して非加盟館がどうかということはなく、強いて言えば事情はむしろ逆である。もとより単館のみの事例でもって即断することはできないが、この事実には verification についての本質的な問題の所在が示唆されているとは言えないであろうか。

ところで、多くの図書館が verification を限定的に行っていることはすでに述べたが、具体的にどのようなものにそれを施しているのかは明らかにされていない。所蔵調査の際に総合目録との照合において、巻年不一致のために書誌事項を確認することはままあることだが、最も一般的なものは、申込者のもたらす書誌事項に欠落がある場合に、それを補足するという意味での verification である。しかしながら、こうした形式的不備が内容的不備とどのような関係にあるのかは、必ずしも明白ではない。事項欠落の申込みには内容に誤りが多く、逆に事項完備のそれには内容に正確なものが多いという仮定に立つ担当者も多いようで

あるが、実際のところ、明確な根拠があつてのことではない。書誌事項の欠落についての先行調査の結果によれば、論題、終頁、号に欠落が多いという。⁹⁾ このうち前二者は、SIST（科学技術情報流通技術基準）で準必須項目とされているもので、これらがなくても他の項目が正しければ、同定に際しては支障のない場合が多いようである。もちろん、そうであっても、一部の非加盟館に見られるように、それらが故意に省略されてよいものでは断じてない。しかしながら、基本的には書誌事項の具備そのものが重要なのではなく、それによる文献の同定こそが肝要なのである。筑波大学附属図書館へ昭和59年度に申込まれた医学図書館所蔵雑誌の文献複写について、書誌事項の欠落状況を示したものが表5である。謝絶件数が多くないので即断することに危険はあるが、少なくとも言えることは、書誌事項が完備されていても相当数の謝絶が生起しているという事実である。

表4. 筑波大学（医学図書館）の文献複写受付における謝絶の実態（昭和59年度）

	加盟館	非加盟館	計	
所蔵なし	19	27	46	58.2%
参照不完	4	5	9	11.4
製本中	5	7	12	15.2
未着	2	6	8	10.1
その他	3	1	4	5.1
謝絶計	33	46	79	
受付総計	413	861	1,274	
謝絶率	8.0%	5.3%	6.2%	

表3. 文献複写受付における謝絶の実態

	東 北 大 学 昭和49年度		順 天 堂 大 学 昭和53年度		川 崎 医 科 大 学 昭和53年度		近 畿 大 学 昭和56年度		大 阪 大 学 昭和59年度	
所蔵なし	558	80.4%	221	46.6%	88	50.0%	70	54.3%	1,545	37.1%
参照不完	80	11.5	64	13.5	15	8.5	16	12.4	318	7.6
製本中	39	5.6	81	17.1	31	17.6	9	7.0	682	16.4
未着	17	2.4	63	13.3	37	21.0	22	17.1	1,328	31.9
その他	0	0	45	9.5	5	2.8	12	9.3	293	7.0
謝絶計	694		474		176		129		4,166	
受付総計	4,645		5,109		1,861		1,844		24,702	
謝絶率	14.9%		9.3%		9.5%		7.0%		16.9%	

表5. 筑波大学（医学図書館）所蔵雑誌への文献
複写依頼書における書誌事項欠落の実態
（昭和59年度）

	送 付		謝 絶	
	加 盟 館	非加盟館	加 盟 館	非加盟館
欠 落 な し	211	443	15	19
終 頁	46	91	3	13
論 題	13	131	1	4
終頁・論題	8	84	1	4
著 者	6	13	1	0
終頁・著者・論題	2	2	2	3
著者・論題	1	20	0	0
そ の 他	0	17	1	3
計	287	801	24	46
欠 落 計	76	358	9	27
欠 落 率	26.5%	44.7%	37.5%	58.7%

注）調査対象は誌名，巻または号，始頁，終頁，発行年，著者，論題の7項目である。

V. verification の新しい視座

伝統的な意味合いでの verification，それも限定的なそれにとどまる限り，謝絶だけの観点からすれば，それはしてもしなくてもそれほど大きな違いはないということになる。したがって，verification を書誌事項の確認として固守していくことに，それほど意味があるとは考えにくいのではなからうか。それというのも，謝絶は参照不完によるというよりは，所蔵なし，未着，製本中にこそ起因するものだからである。verification を単に書誌事項の確認としてだけではなく，所蔵状況，到着状況，製本状況の確認を含めた総合的な視野から捉え直すことが必要であって，そこにこそ実効ある verification の復位が可能となるはずである。もっとも，かかる verification には，現行の相互貸借業務の枠内で獲得しうる確認と，それを支える基盤の整備を俟たなければならない確認とが併存しており，その実行は必ずしも容易ではない。しかしながら，そうであっても，たとえば所蔵状況の確認において，前者に関して総合目録の誤認が多いとすれば，担当者の自己研修や個別館におけるインサービス・トレーニングはもちろんとして，JMLA としての教育・広

報活動に不足がなかったかどうか，後者に関して総合目録のデータに誤りや不適切なものが見受けられるとすれば，加盟館の提出するデータの品質管理に改善されるべき点がなかったかどうか，さらに，有効な手立てがないものとされてきた到着状況や製本状況の確認についても，現行医学雑誌所在目録や加盟館統計の編集に工夫を加えることで，新しい局面を開くことができないものかどうか，やはり再考する余地があるのではなからうか。

これまでもさまざまな主張が現場からなされてきたが，そこに共通する verification の語義の拡大は，事新しいことではないにせよ，このことは図書館員の自覚とか力量とかの個人的レベルに帰せられる問題ではなく，JMLA の組織をあげて検討しなければならない性質のものである。にもかかわらず，これが JMLA 全体の問題として正面から論議された形跡はないようである。それにひきかえ，書誌事項の確認だけを強調しても，実際の文献流通の円滑化にそれほど関係がないのでは，参照不完が全盛を誇った過去の記憶への執着か，あるいはまた，書誌情報の取扱いにたけていることが，図書館員の専門性のすべてであるかのごとき旧弊な解釈に頼るものではなからうか。そうでなくとも，相互貸借活動に関連する議論のほとんどが，図書館側の業務の相互性ばかりを前面に出し，利用者への文献提供サービスという視点をないがしろにしてはいないであらうか。¹⁰⁾ 自戒したいと思う。

もちろん，このような確認もファックスから，あるいは学術情報システムによって端末から，受付館からの通知を即時に入手できれば，依頼に先立つ verification など意味をなさなくなるのかもしれない。しかしながら，いわゆるニューメディアが一般化しても，依頼や照会の処理そのものは受付館に委ねられているから，その対応いかんによっては，現在の郵便による方法と時間的にはそう変わらないかもしれないし，また，電子メールにしてもファクシミリにしても，その利用が全加盟館に普及するには，なおしばらくの日時を要するであろうことも確かである。したがって，JMLA が現在の組織と活動を維持していく限りは，これについての対応を講じること，少なくとも共通の理

解を設定しておくことは、やはり必要なことではなかろうか。

VI. お わ り に

JMLA の相互貸借活動が質的に最も高い水準にあり、他のネットワークの規範となっていることは広く認められているとおりである。それが長い歴史と伝統を背景にして、図書館員自らの努力と JMLA という組織の紐帯によって獲得されたことも事実である。しかしながら、JMLA の表看板である相互貸借活動において、その質を高める手段であった verification が、いつのまにか図書館員の専門性を云々するためのものになってはいないであろうか。もう一度、それ本来の目的と現在の環境条件との相互作用域のなかで、その在り方を具体的に吟味していくべきではなかろうか。そうした問いかけのなかからこそ、利用者に信頼され、その支持を勝ち得る活動が展開するのであって、それこそが図書館員の専門性についての議論を並び立てることの前に先立ってあること、それゆえにこそ、図書館員は個々に、または連帯して自らの質的向上を図らねばならないということ、このことをやはり謙虚に受けとめておきたい。

参 考 文 献

1) 大倉正次：相互貸借業務を円滑に運ぶために。第

5 回医学図書館員セミナー論文集；207-215, 1979.

2) 岩田美和子：参考文献記述の正誤率。第13回医学図書館員研究集会論文集；251-259, 1979.

3) 張元正義：相互貸借業務と Verification - 当館と城西大学図書館との相互貸借統計から -。第19回医学図書館員研究集会論文集；217-222, 1985.

4) 吉川和幸：文献相互利用上の問題点 - 所蔵事項・書誌事項の確認について -。第10回医学図書館員研究集会論文集；173-175, 1976.

5) 倉元千恵子：相互協力の再点検。第6回医学図書館員セミナー論文集；271-307, 1980.

6) 岡本和子：文献複写と相互協力 - 貸方業務の立場から -。第6回医学図書館員セミナー論文集；190-222, 1980.

7) 妻鳥悦子：相互貸借から相互協力を考える - 受付業務の現状と課題。第17回医学図書館員研究集会論文集；194-202, 1983.

8) 大阪大学附属図書館中之島分館相互利用係：相互利用による文献複写申込みについて。1985.

9) 稲川典子：相互貸借申込の為の書誌データ確認の方法と問題点 - 利用者申込書記述形態を参考に -。第16回医学図書館員研究集会論文集；208-214, 1982.

10) 小野沢繁雄：相互貸借ノート サービスとワークの間で。第11回医学図書館員セミナー論文集；111-119, 1985.

*

*

*